

6) 毒物その他による中毒

広瀬 保夫 (新潟市民病院
救命救急センター)

平成元年～7年の新潟市民病院救命救急センターには、年間97～140名の急性中毒患者が来院している。代表的な原因物質としては、医薬品25.4%、農薬9.8%、一酸化炭素6.9%となっている。今回は上記以外の原因による「その他の中毒」について検討した。

上記以外の原因物質としては、小児によるたばこ誤食(20.4%)、急性アルコール中毒(21.3%)が多かったが、いずれもほとんどが軽症であった。自然毒では、食したもとして、トリカブト、きのこ(ツキヨダケ)、フグ、バイ貝などがみられた。またマムシ咬傷、オコゼ刺傷例があった。家庭用品では、灯油、トイレ洗浄剤、保冷剤、防水スプレーなどによる中毒症例が受診していた。また特殊なものとしては、メタノール飲用やLPガス吸入による死亡例もみられた。

中毒の原因物質は多種多様で、その全てに精通するのは極めて困難である。未知の物質による中毒の診療では、中毒110番などの積極的な活用によって、情報を収集することが極めて重要である。

7) 中毒に対する血液浄化法

丸山 弘樹・荒川 正昭 (新潟大学第二内科)

中毒に対する血液浄化法は、初期治療が適切に行われた後で、中毒の原因物質の除去と(多)臓器不全の予防・治療を目的に行われる。中毒物質の分布容量、蛋白結合率、分子量、半減期などを考慮して、血液吸着(HA)、血漿交換(PE)、血液透析(HD)、持続血液濾過透析(CHDF)を選択し、中毒物質を体外へ排除する。(多)臓器不全を併発している際には、病態に応じて、腎不全にはHD、CHDF、肝不全にはPE、CHDFが行われる。循環動態が安定し中毒物質の血中濃度が高い場合には、HA、HDを行って血中濃度を安全域まで低下させてから、CHDFで血管外に移行した中毒物質の除去を図る。多臓器不全を併発し循環動態が不安定でHDを行えない場合は、CHDFを選択するのが一般的である。

今回は、中毒に対する血液浄化法の原理と適応について述べた。

第3回新潟周産母子研究会

日時 平成8年11月2日(土)
午後2時～5時
会場 新潟大学医学部
第三講義室

I. 一般演題

1) 当科における先天異常児の統計

佐々木 将・藤巻 尚
安田 雅子・安達 茂実 (長岡赤十字病院)
須藤 寛人 (産婦人科)

昭和57年から平成7年までの14年間に当科で出生した先天異常児で日本母性保護産婦人科医会の「外表奇形統計調査」に報告した症例につき検討した。

14年間の分娩総数は12,677件、奇形児は178人だった。この頻度は日母の全国統計の1%強にほぼ一致した。

最近の日母の奇形の統計より、頻度の高いものとして口唇口蓋裂、ダウン症、水頭症、多指症、口唇裂、口蓋裂、耳介低位、無脳症、鎖肛、髄膜瘤だが、当科における部位別分析では副耳を含めた耳の異常が38例と最も多く、その他、口唇口蓋裂、水頭症、指の異常が多く見られた。

2) 当科における周産期母体搬送の現況

浅野 堅策・織田 和哉 (佐渡総合病院
産婦人科)

過去3年間に佐渡病院から周産期母体搬送症例は7例あった。その内訳は、妊娠23週から28週の切迫早産もしくは前期破水例が4例、HELLP症候群にて帝王切開後、産褥子癩を生じたものが1例、重症妊娠中毒症で入院管理中、妊娠31週で血圧上昇を認めたためターミネーションが必要と判断されたものが1例、Rh陰性例の前置胎盤で、緊急の出血に対し佐渡では血液の確保が困難なため妊娠31週で管理入院としたものが1例であった。搬送中のトラブルはなかった。佐渡地区からの母体搬送は、陸送と比較してより時間を要し、また汽船などは患者輸送専門の媒体でないためリスクも大きい。原時点では、早期の搬送により対応しているが、受け入れ先病院の負担増の問題もある。将来的には、佐渡地区のNICUの体制の整備、ドクターヘリのような患者輸送設備の充実が望まれる。